

保母を育てくれる子どもも達

山 田 真理子

I はじめに

「子どもが変わるのは、まず保母が変わらなければならない」「子どもは保母の鏡である」などとはよく耳にするところです。

筆者は、障害児の治療にたずさわるかたわら、その子どもたちの通う幼稚園、保育園での職員研修に参加し、保育者達の助言指導を続けてきました。そうした中で、その子どもたちもとより、その子どもたちを担任した保育者達が一步一歩変わってゆく姿によく出会いました。彼女達は、それまで自分が身につけていた技術がその子ども達には、通じないことに悩み、本当に自分はこの子に何がしてやれるのだろう、何をしようとしているのだろう、保育って何をすることがなんだろうと考え、応々にして自分の生き方、性格までも聞い直されながら、その中で何かこれまでつかみきれていたかった確かなものを感じていたようでした。ここで、障害児を担任したある保母の記録をもとにその歩みをたどってみたいと思います。（尚、子どもの名前は仮名です。）

II 子どもに育てられて

(1) 「私が主任？」

保育園で俊君という自閉傾向の子供を預る事が決まったが、自閉症つて言葉すら聞き慣れない。十年間いろいろな子どもを保育してきたが、俊君は会話ができず、対人関係が希薄で集団行動がとれず、母親との関係も薄く、多動とか。これまで一年間一対一の療育を行なってこられた先生に説明をきくが、何もかも耳新しく、驚くばかり。私にはとてもこんな難しい子供さんは保育できないと思うが誰かが担任しなくてはならないのだ。先輩保母の顔をチラと見て、きっと経験豊かな先輩が担任して下さるだろ

うと逃げ腰に、かくれるようすわっていた。ところが何と「先生をお願いします」という園長の声。園長命令とあれば仕方ないが、急に肩に重い荷をのせられた気がする。「はい、どこまでできるか分かりませんが…」の言葉が間が抜けた様に弱々しい。入園式まで、何度も療育教室からの資料を読み直す。

(2) 緊張の連続

俊君と対面。まずは週一日、お母さんもいてもらつての保育がはじまる。「俊君お早う。」と挨拶し、名札をつけようとする保母をふり払つて一目散に本箱へ。お母さんや他の保母の手前、担任の面目まるつぶれ。十年の経験があつという間にうちくだかれてしまふ感じがした。そしておもちゃ箱へ、身仕度なんぞそっちのけ。視線が合わない、じつとしていない、小さなおもちゃを口に入れ、ゲームを上手にする。できることでできないこと、知ることと知らないことが極端だ。あっけにとられて彼のすることを棒立ちになつて見ている。突然「ママ！」と叫ぶが、しかしお母さんに抱きつくでもなくブロック遊び。たつた半日で「うわー大変だ！」と思はされた。準備期間中、自分なりに心つもりし、覚悟しているけれど、することなど普通では考えられない程けたはずれ。これから先一体どの様な事態が起ころやら…これから保育に不安を感じずにはいられない。

俊君の来る日は、朝からピーンと体まで緊張する。気嫌よく来てくれるかなあ、どんな遊びをして、どんな言葉を言ってくれるかなあ。じっくり様子を観察しなくては、といつもエプロンの中にメモ帳と鉛筆を入れておく。俊君の来た日は、終わるとどつと疲れてしまう。週1日がせいいっぱいい。

月1回の助言者の先生を迎えての職員研修の日は、朝から試験でも受けられる様な緊張した気分。時間が迫つてくるとどこかに逃げ出したい様な不安感で俊君を抱きしめたりする。でもとにかく大きな間違いはなくひと月がすぎたと確認して頂き、すこしほつとする。

(3) 「何が好きなの？」

少しでも俊君の事を知りたいと思い、登園バスの迎えもかつて出た。バス停から園までの坂を一緒にのぼる。途中で工場のミキサーカー車を見おろすのが日課。「ミキサーカー」と可愛い舌で言つてくれる。絵本でも乗り物

の名前は正確に教えてくれる。毎回、同じ本をピシッと並べ、ピラピラと指を動かしながら楽しそう。乗り物の他に音楽に合わせて体を動かすこととも好きらしい。緊張をほぐすために（子どもと私自身の）自由表現やリズムを取り入れた。

ある日、俊君が鯉のぼりのポスターをじっと見てるので、抱っこして「これは鯉のぼりよ」と指さすと「ぱい、ぱい」と手でなでる。嬉しくなって、お集りの最中でも、2人でそとぬけ出してポスターを見に行ったりする。この時だけ、私も俊君も誰にもじゃまされず、楽しいやりとりができる。今までは、はれ物にでもさわるような思いで見ていたけれど、こちらの緊張もやつとほぐれて、すこし気楽な気分で接しられるようになつた。

少しづつ園の生活になじんできたのか、身仕度や乾布まさつも落ちついてしてくれる。園児服のボタンかけをする時は決まって私のひざの上のつてほほをさわったり、なでたりしてくる。私も俊君の顔や頭をなでたり、高い高いをしたりが、自然にできるようになつた。俊君にも、私にも余裕がでてきたみたい。

(4) 子ども達

俊君は乗り物の絵本だけではなく他の絵本にも興味をもち出し、私や子どもたちに見せに来たりしました。クラスの子どもも俊君に少しづつ注目してきた。今迄「先生俊君なんで座らへんの？」「なんで私らと同じ事いやはらへんの？」「いつも乗り物の絵本とブロックばつかしゃ」と言っていた子ども達が「先生俊君が絵本見せてくれはつた」「俊君繩とびしつた」と報告して喜んでくれる。そうだ、俊君をお客様扱いにしていては、俊君と他児とがお互いに育つていくという芽が摘まれてしまう。他児と俊君の関わりも大切にしなくては…。

ところが、他児が、俊君にやさしく、めんどうを見てあげるいい子になつてくれることを期待していたその気持ちは、篤君によつてみごとにくつがえされてしまった。6月ごろから篤君は日増しに安定を失ない、乱暴になつて、床に寝ころび、おしつこもちらしつばなしで、俊君の手にしている絵本やおもちゃをさつと奪い取ってしまう。俊君と絵を描いていると横か、紙を出して、「ひこ書き描いて」と言つてくる。サッと描いて渡すが「もう」と来る。正直言つて今は俊君と出来るだけ集中的に遊びたい。屋

休みなどはできるだけ2人ですぐです。他の保母に「もっと篤君にも関わらず」と言われるが一度障害児を担任してみたらいい、体は二つはないのだから、とてもじゃないが担任したことのない人にはこの苦労は分かるまいという気になる。ところが、そんな私の篤君一辺倒な態度に猛烈なパンチをくれたのは、そんな先輩保母の助言でなく篤君自身だった。ある日、パンの嫌いな篤君をひざの上に抱いてパンを食べさせていると、篤君がやってきて、篤君の前に置いてあった乗り物の絵本をさっと取って逃げた。篤君は追いかけて行ったが取り返せずに私のひざに戻ってきた。そこへ篤君が追いかけてきて「ピシャッ！」とまともに篤君の頭を叩く。篤君は大泣き、私は逃げる篤君を追いかけ厳しく叱った。篤君は逃げながら、お母さんに抱かれて泣きじゃくっている篤君を何度も叩き、お母さんも声を出して泣かれる。私はそのままじい光景にただ唯然と立ちつくす。涙を流しながら帰るお母さんに必死で弁解じみた言葉をつらねている自分も悪く思ひじめ。それよりも、篤君のパンチで、今までガーンと頭をなぐられた思いがする。篤君に力を入れすぎ、篤君の気持ちをことごとく踏みにじった自分にも始めて気づいた。自分で自分がなきなくなり、夜ふとんの中で泣いてしまう。何で自分ががこんなん目にあわんといかんのや。特別に間違った保育もしないといいうのに…。保育園にいる時も、家に帰って床に入つても、苦しいといいうよりみじめにさえなって、いつそのこと保母をやめようかなんて思いも頭をかすめる。でも何とか気をとりなおし、私はこの子達の担任なんだと自分にいいきかせながら一日一日に精一杯ぶつける。職員研修では、助言者の先生から、篤君に対する篤君の関わりは、真実の感情をぶつけたもの、子ども同士の対立として、必要かつ大切などだと言われる。篤君にとってマイナスだとばかり思っていた篤君の汚暴やちょっかいが、篤君の中に徐々にそれに対抗する強さを生み出してゆくのをみて、かばって、かまってばかりいた自分の間違いを篤君に指摘された気がした。

四 (5) 篤君の裏切り
こんなにも思いをかけているというのに、秋に入った頃から篤君は朝の出会いがしらに私のほうををねったりイーッと叫いたりし、本を見てやつと落ちつくといった様子が目立ってきた。せっかく篤君が落ちついてきたら今度はまた篤君だ。さらに私の目の前でニコニコと他の保母の手を引い

たり甘えたりする姿には本当に我が子をとられた様な辛い思い。取り戻していきた自信が一気にくずれていく思いがする。私の一体どこが氣に入らないのだろう。その保母がいつもピンクの服を着ているからかなと考えて私も着てみたが、やっぱり駄目。焦りは祭物、焦ってみてもイララしても篤君が戻ってくるわけなしと自分に言いきかせても、やっぱり寂しい。時にふと篤君が側にきて言葉をかけてくれると、まるで大スターに話しかけてもらつたよう嬉しい。

この緊張状態はその月の職員研修での助言者のことばでズバリと言われた。「あなたが『さあやったぞ』と構えていることが、敏感な篤君には何か待ち構えられてるような重荷になつてはいるのではないか。篤君自身も緊張、保母も緊張、そこで才三者の何の構えもない保母の方が気が安らぐのもしませんね。」

何ごとも真剣に取り組もうとする私。そつなくピチッとしようとする私の性格から出た私の態度に篤君が反応していたとは！保育には何より、子どもがゆつたりとくつろいだ気分をもつて、その中で自由にふるまることが第一歩だというのに…。保育の第一歩に立ち戻つて考え直さなければ…。

毎々とした日が何日も続いた。私のような人間が保母になつたのがまだがいだったのだろうか。私には、障害児を担任するなんて重荷すぎなのだ。何故園長は私を選んだのだろう。私の性格を今さらかえることなんてできっこない。あ々、こうイラつくことが篤君をイラつかせるのだなあ…。まもなく私が落ちついてきたのか、篤君が落ちついてきたのか、私の手を引きにきてくれることが増え、部屋の中で落ちついて遊んでくれることが多くなった。何かがふっきれたかんじがして、篤君の登園回数を週3回にふやすとも、そろ大きな負担に感じなくなっていた。お集りもびっくりするほどスマーズになり、私もゆつたり子ども達もゆつたり。口数多く言わなくてみんなぐんぐんついてくる。篤君も一所けん命。こんな幸

せな気分の保育って今まで十年間味わつたことがない。私はいったいどんな保育をしていたんだろう。このころになると篤君も「抱っちょ」と甘えてきたり、わざと悪戯したり、一人で食べられるのにわざと残して「食べさせて」ときたり、何ともやりとりが楽しい。

(6) 1年が終つて

この一年、俊君、篤君を担任させてもらつて本当にいろいろな事を学んだ気がする。俊君後君と周囲も目に入らずに熱を入れていた私に、ドカンと篤君の登場。周囲の人たちの助けもあったがやはり担任としての自分を自覚するしかない。さらには俊君が他の保母に甘えて去つて行った時のみじめさ。これはもう自分自身との戦いで克服するしかなかった。とことん悩みぬいた時、一寸したきっかけで俊君と篤君との苦しみが共鳴したようにはパッとつながりが出来る。その時の感激は忘れられない。第三者からだけ意見を出してもらつても、やっぱり人それぞれ個性がある。最終的にはその担任の保母が自分なりの方法でアタックするより方法はない。俊君がどんな時に手を引きに来てくれるのか、今どんな遊びで安定期しているのか、見ていればきっと開いてくれる窓があるはず。無理して力んでいては、近寄りにくくしてしまうだけ。自分にとって一番無理なく、これぞつていう関わりを自分でみつけるしかない。それはとても健常児では味わえない真に迫った迫力ある関わりである。苦しみぬいてパツとその子と心がつながったときの嬉しさは担任したものでない不分ら。

それにクラスの他の子ども達のすばらしさにもあらためて感謝したい気持ちで一杯。本当にいろいろなことを教えてくれた。そして俊君や篤君に気を奪われている担任を見捨てもせずによくついてくれた。

それに比べて、「あの先生はあんな子どもさんを受け持たはって、特別に給料の外にお金もろてほんのやろ」という心ない大人の言葉。そんな目でみられていたのかと思うと、なきなくて涙が出了。でもいい、子ども達は分かってくれている。これほど子どもと一体になった氣もちになれたのははじめてだ。

(この後、組替えがあり、半年間、別の保母が俊君を担当しましたが、2年目の秋から再び、職員移動のために担任が変わることになり、俊君の担任はこの先生が買つて出ました。俊君は元気に、残されたわざかな園生活を楽しみ、現在、小学校に入っています。そして、この俊君の就学をきっかけに、この地域の小学校教員の中に、教育とは子どもに何をすることがなかとの問い合わせがおこり、保母との交流が深まっていることをつけておきます。)

III 解 説

ここまで報告で担任の先生の成長は明らかですし、私が、月1回の職員研修で助言したことも報告の中でふれられているので蛇足かもしませんが、少し解説を加えたいと思います。

ある時、幼児教育学科の学生に自閉症や情緒障害についての講義をし、卒直な意見を求めたところ、大部分の学生が、「正直言って、もし自分の就職した園に障害児が入園してきたら、自分のクラスには入れてほしい」と述べていました。これは本心だろうと思います。障害児も健常児の中で保育すべきであるとか、すべての子どもに教育・保育の機会が与えられるべきであるとか乍今強く言われていますが、そのようなことを言う前に、受け入れる保育者一人一人の「私が担任してみたい。やらせてみてほしい」という気持ちを育てる作業が必要なことを忘れてはいけないでしょか。この先生も、正直、俊君が入園していくと聞いた時は、誰か先輩保母が担任してほしいと逃げ腰でしたが、これはこの先生に限らず誰でもそうだつたと思います。(一年後の組がさんの時、この先生は「私が担任したいな」と思ったと聴き、本当に嬉しくなりました。しかもこの園では、障害児を担任すると自分自身が成長できるという雰囲気がいつの間にか広がつてあります。)

担任が決まって、先生はとにかくやってみる覚悟を決め、資料を何度も読みます。このへんも賛否両論あるところでしょう。「保育はまずその子と出会うところからはじまる」として、あらかじめ人から情報を頭に入れてしまうと、その色眼鏡で子どもを見ることになってしまうという意見も一理あります、しかし担任する方の気持ちとしたら、やはりどんな子なのか不安でしょうし、不安をもつたままその子に会うより、仮にでも保母がその子のイメージをつかみ、「よし!」という気になれて、すこし気持ちをおちつけてその子に会えるなら、その方がいいかもしれません。しかし、このような努力も現実のその子の前に出たらひとたまりもなくうちくだかれてしまふことは記録にもみられる通りです。つけ焼刃は無駄です。特に情緒障害といわれるような子どもは人一倍鋭い感性をもつていますから(それ故そくなつているのですから)、先生の中の本当とウソ

を見分ける力はすごいものです。そして、それだけではなく、「おはよう」と笑いかければ、はずかしがつたりもじもししながらでも目を合せて答えてくれる健常児とちがって、俊君はさつと身をかわし、自分の好きなものに一早く直行します。当然と思っていた日常のささいなやりとりがくすぐった時、それは「ささいなこと」ではあります、それまで十年間の経験が一挙にガラガラと音をたてはじめるような地鳴りに感じられるのです。何もかも分からぬだらけの俊君については後になつてしまふ。これは先生の不安を軽くするためには後になつてしまふが、俊君のためにはマイナスです。何故なら、そばにいて自分のじゃまをせず見てくれば心は動かぬ観察者に俊君が心開いてくれるなら次第に俊君も気がおちつき、先生との心のつながりがもてるきっかけがつかめるかもしれません、メモを片手に「観察」している先生に対しては俊君も過敏に反応して不安定になり、はっとすることもできないのではないかと思うからです。

職員研修のときこのことに触れて、「メモしなくては忘れててしまうなことは、先生の心がとらえたことではなく頭がとらえたことですから、そんなことは覚えておく必要がないことでしょう。心動いて感じたことは忘れようにも忘れないものです。そしてやっきになつて観察していくは心は動かなくなってしまいます。心動かぬ観察者に俊君が心開いてくれるとは思えませんが」と言つたことを覚えていました。先生はまもなく、メモ帳をもつて追いまわす（その気はなかつたのでしょうかから、言葉が悪すぎるかもしれません）ことをやめられました。

次第に先生は、こちらが遊びに導入するのではなく、俊君の好きなもの俊君の方から開けてくれる窓に自分を合わせようとしはじめます。このあたりに、保育に対する先生の態度の変化の一歩がうかがわれます。俊君もそんな先生に徐々にうちとけてきたようで、鯉のぼりのポスターを媒介にして、より自然なやりとりが生まれます。保母の余裕が子どもにも伝わって俊君の行動が変化してきます。「たいへんな子」、障害児、自閉的な子という目でみると、どうしても他の子たちがつたことをやることの方ばかりになります。ある時ふと「この子も普通の子とかわりないやないか」という感覚をもつたときに、その子の健常な面が次々と見つかってゆき、それに先生が応じることでその子の健常な側面がどんどんのびてゆくようです。保

育は、その子の不健常な面を嫂しまわることではなく、健常の面の芽をす早くキヤッとしてそれに応じてゆくこととはむしろ稀です。たいていは、健常児と同じことのためにハッと気づくことはむしろ稀です。それが健常な面をのばすことだと感違ひして）、それができないと、やっぱりこの子は障害児だから無理なのかなと思ってしまうということがあります。このような関わり方はつまり、障害児というレッテルを裏づけるデータ集めにばかりなってしまって、その子の成長につながっていないことは明らかでしょう。

先生と俊君は、まずはひと山こえて、うまく動き出したようですが、先生が俊君に熱心なあまりに起つてくる後述のトラブルは既にこのあたりに崩壊がみられます。

「子ども達」のところで語られている「いい子達」と俊君はどちらも多くのことを教えてくれます。まず両者とも、子どもの心の敏感さを教えてくれます。先生が俊君を大切にしようとしていることを敏感に感じとっています。そして「いい子達」は、そんな先生のまねをして自分達も俊君にやさしくあろうとします。これは、俊君がいることで子ども達の心にやしさしさが開花されたともうけとれます。一方で、子ども達は先生の気持ちを敏感に察知し、俊君にやさしくすることが先生をよろこばせ、先生に認めてもらいたい、先生に好かれるためのいちばんいい手段と感じ、俊君に対し当然おこつてくるべき憎しみや攻撃性をおさえつけているのもしれません。私にはこの「いい子達」にはどこか無理があり、背のびがあるような気がしてなりません。そこにみごとに一石を投じるのが俊君です。俊君の極端な反抗や赤ちゃん返りという手段はともかく、俊君が俊君に向ける攻撃性の中には、他の子達がしたくともできない（先生にきらわれたくないという気持ちから）ことを肩代りさせられるという危険を犯してまで、情緒障害といふ君はむしろ、自分が嫌われている面もあるかもしれません。俊君も俊君の危険を犯してまで、自分の成長を一時放棄してまで先生に真実をつきつけたといえるかもしないのです。いい子達は、そこまで自分でお金を賭けて先生にぶつかれなかつた子達といつてはいいすぎでしょうか。いい子達の心の中には「おさえてしまった自然な気持ち」があるかもしれない「危険性」と、俊君の「困った行動」の中にある「真剣さとすばらしさ」をここで指摘しておきたいと思います。

篠君のパンチを真正面でうけとめ、先生はここで、かまい・かばうといふ一面的な保育から、さらに入り組みのあるものに気づいていかれたようです。真剣なぶつかり合いなしに人間が成長するなんてことはありえないのです、後君に限らず…。人間の成長に近道や促成はないのです。もし一時的にそうみえて、も、もっとあとになっておつりがきた時は、そのやり残したこところまで戻ってやり直さなければならなくなり、近道で節約された何倍もの時間と労力と犠牲が必要となるでしょう。

篠君の関わりによって、後君の中に、やさしくされただけでは得られない「強さ」が芽生えています。
さて秋以降の後君の態度の変化によって先生が問われたものは、もはや保育技術といったものではなく、それまで生きてきた先生の生き方、人生への処し方といつたものだつたようになります。
しかもやがてこのことが間われるであろうことは、初期のメモ帳騒動の時予測されていたことでもあるのです。でも、たとえ助言者や先輩保母が「あなたのような関わり方では子どもは追いとばされてしまうようで、きゅうくつじやないかしら」と口をすっぱくして言ったとしても、この「後君が去つてゆく」ということ以上の効果をもつたとは思われません。これを「どうやって(how)、のりこえたのかはとても言語化することはできないのです。先生も「自分なりに自分でみつめるしかない」といっておられます、それこそ、自分のこれまでの生き方に先生自身が真剣な目をむけ、よそに助けを求めるなかつた（人に「how」を問うことをしなかつた）ことにその鍵があります。健常児では味わえない醍醐味があると先生は言っておられますが、健常児は保母に対して寛容で、思ひやりがあります、やさしさです。障害児はその余裕がなく、保母の真実を追求しつづけてしまうのでしょうか。大人にとって自分の生き方の真実を追求されることほどつらく、いやなことはありません。しかしこの先生の最後の一文をよむと、それはほど実り多いことでもないのかもしれないと思ひられます。

ここで、2年目の秋におこった先生と後君にとっての一大事件（すばらしいひと時）を引いてみたいと思います。

IV ハミガキ事件

その日の後君は午前中から何故か気分がのらぬ様子で落ちつけなかった。その上、その日のお昼は後君の嫌いなサラダだった。私がヒザにのせて食べさせると、後君は嫌な顔をしながらも一所懸命たべてくれた。
しかし、半分位食べたところで、後君はパッとヒザをおりるとハミガキをもって外に出でてしまった。「もう、ごちそうさま！」ということだろう。すいぶんがんばって食べたのだから…と部屋で待っていると、悲愴な顔で泣きじやくる後君を他の組の保母が連れてきてくれた。一人で立ちすくんでいて、「どうしたの？」と聞くと急に泣き出したということで、その保母にも事情がつかめぬらしかった。
とにかく後君が何か発散してしまいたい悲しみをかかえていることだけは伝わってきて、私は何がそうさせているのかは知らないながら、その気持ちを発散させ、洗い流させたいという気持ちにかられた。私は後君のもっていたハミガキのチューブを取ると、ギュッとしぶしぶて床におとして、それをそつと指でなぞった。一瞬驚いたような表情で見ていた後君は、自分もすわりこんでチューブからハミガキをしぶり出し、一緒にぬりたりはじめた。「ハミガキなんてまだ買えばいい、今、後君の気持ちの傷を少しでも癒しておけなかつたら、とり返しがつかない！」という氣もちで私は両手まっ白にしながら床にハミガキをなすりつけた。後君は泣き続けながら、床にも、そして私のかおにも私の服にもハミガキ粉をなすりつけた。私のかおにななりつけながらじっと涙いっぱいの目で私を見つめる後君に、私は何かが通じた感じがした。
後君は立ちあがると、私の手をひいて流し場に連れて行った。後君は水を出して、まず自分の手を洗い、自分のかおを洗い、そして石けんをとる手を包むようにして洗ってくれはじめた。私はびっくりして後君のなすがままにさせていた。後君は泣きながら、私の両手を洗い、そしてかおをふくと、私の手、かおも一所懸命でいねいにふきはじめた。目のまわりもそつとふきとつてくれた。私は後君にかおをふいてもらひながら涙が流れとまらなかつた。感激！

IV おわりに

筆者がこの保育園のある地域の療育教室及び保育園等と関わるをもつてから5年がたちました。この地域では、「つまづきのある子どもたち」のための研修会（つくし会）があり、私は療育教室のスーパーバイザーとして療育にあたる一方で、つくし会にも参加させて頂くことになり、現場での問題に関わることができました。そしてその他に、療育教室に来ていって、なおかつ保育園に通う子ども（俊君もその一人です）については、その園での職員研修に月1回参加するなど、様々なつながりの中で歩いてきました。そしてその中で、誰か誰を育てるのでもなく、互いに育てられあう、つまり子ども達によって保母が育てられたように、保母やセラピスト達によって私は大いに育てて頂いたと思って感謝しています。

（昭和56年8月稿）